

# 初志をつらぬこう 同志を求めて

重松 鷹泰

心ある人びとへの切なる訴えです。同志の方々に伝えて下さい。

三十五年前、わたくしたちは、社会科の初志をつらぬく会を発足させました。社会科それ自身は、終戦直後の昭和二十二年に発足しました。その社会科の初志とは何であったのでしょうか。

中支派遣軍の一兵卒としての一年九ヶ月の生活を終え、二十一年三月に東京都の事務官に戻った。わたしは、その九月から文部事務官に任ぜられました。わたしは、進駐軍の指示により、社会科（わたしは小学校担当）の発足の準備、学習指導要領（試案）の作成にたずさわりました。この時の CIE（進駐軍司令部の一機関）の検閲はきわめて周到でしたが、きびしい指示を与えたり、やかましい拘束を加えるものではありませんでした。したがって、社会科の学習指導要領は、きわめて柔軟性のあるものとして誕生しました。これは社会科そのものが日本人自身のものであるとして、創造され、発展していくべきものとして、位置づけられたことを示しています。納得しかねるという方もあると思いますが、よく考えてみて下さい。終戦後の窮乏と混乱のわが国民に、その生き方を創っていくように、示唆を与えたものが、社会科なのです。我田引水的な説明のように見えるでしょうが、そうではありません。きびしい事態の要請に応えるものがあらわれるのが、自然の道理だからです。

社会科は単なる一教科ではないのです。新しい教育のあり方です。いや、古くから続いている、ほんとうの教育のあり方です。敗戦という鉄槌が、わたしたちに、たよりになるもの、ほんものを、悟らせたのです。それは教育のあり方ですが、われわれの生き方そのものなのです。このように社会科をとらえた上で、社会科の初志というものが、いかなるものであるか、考えて下さい。

社会科の初志は、日本人たちを、日本人本来の生き方に、立たせようというものです。それは、人間本来の生き方と別のものではありません。日本人なりに具体化したものです。社会科はアメリカのものである。民主主義を、日本に普及し宣伝するためのものである、という見解は、正しくありません。社会科は、アメリカへの追随を余儀なくされていた時期の仮構物にすぎないという見解も、同じように正しくありません。こういう見解は、社会科の初志を正しく捉える妨げになるものです。

前途の、人間本来の生き方とは、生活の基盤である自然の理法を探りながら、人びとが自分と自分たちの生活を創り続けていくことです。日本人本来の生き方とは、自然の趣を愛し、人びとの情に生きて、謙虚でたゆまない努力を積み重ねていく、というところにあ

ります。わたしたちは、そのことを説明しませんでした。心ある人びとが自得し、支持して下さると信じているからです。

わたしたちは、「欺かれない人をつくろう」とも言い、「天下り教育を排しよう」、「注入を是とする立場を排する」とも主張しました。また、「社会科はすべての教科の基盤である」とも、「社会科は生活学習である」とも「社会科は、求道である」とも、主張しました。また、「学習の評価も、今までの枠によらないものにすべきである」とも言いました。「考える子ども」というモットーを選び、機関誌の誌名にしたのも、前途のような願いを表しています。

「考える子ども」とは、自分なりに事物事態の真相を捉え、自分の責任において、自分なりの行動をしていく子どもという意味です。したがって、「考える子ども」は、自立した個であります。

わたしたちは、社会科の初志をつらぬくことをめざし、同志の結集協力をはかってきました。しかし、わたしたちの会は、教師としての社会科の教師の集団と限定されてしまいがちです。「考える子ども」というモットーを掲げても、この誤解の壁を乗越すことが、なかなかできませんでした。それで、「個を育てる教師のつどい」という別称を併用することにしました。(昭和六十二年の「考える子ども」一七五号から)。そして同志のつながりの拡がることを願っています。

わたしたちの育てようという個は、自立した一人ひとりの人間であり、その人独自の人間としての尊厳を実現しつつある人です。外からの圧力に屈しません。暴力を加えようとする人びとに、きびしい自己反省を起こさせるのです。戦争を放棄したわれわれは、人びとの中に涉み出してくる内的威厳によって、自国を護り、自分たちの主張を貫徹する以外に途はありません。社会科は、戦争放棄の一大決意に応える志をもっていたのです。したがって、社会科の初志の中には、各人の内的威厳を發揮させることが含まれていました。

社会科の初志は、戦争を放棄し、人間の内的尊厳にたよって、人類の幸福を実現しようとする、日本人の決意そのものであり、日本人の日々の生活のよりどころであるのです。誇張した表現のようにとられるかもしれませんが、社会科の初志は、生涯の究極目標でもあり、人びとの努力・創造のいとなみであり、天の道でもあります。

わたしたちと同じように、われわれ日本人の行く道を考え、教育のあり方を考えて下さっている人は、皆わたしたちの同志です。いっしょに道を切りひらいて行きましょう。

わたしたちの機関誌の巻末を辿ってみました。二号から三〇号まで次のような枠組みの文章があります。

- 一、**注入主義をいかなる意味においても受け入れない人**
- 二、いわゆる系統的知識の強調に対して疑問を持つ人
- 三、今日さかんに推進されている徳目主義的な道德教育に賛成できない人
- 四、**社会科を自分の研究や実践の真正面にすえている人**

- 五、ささいに見えることがらに対しても自分独自の研究をもつことにつとめ、必要があればいつでも、主体的な意見が発表できる人
- 六、権威をおそれず、権威によりかからず、また他人に対して権威あるかのようにかたることをしない人
- 七、**つねになっとくのいくまで自分の考えをつきつめ、外からの圧迫や誘惑によって節をまげることのない人**

「考える子ども」三一号（一九六三年九月）から、梓組みの中は、「社会科の初志をつらぬく会綱領」として、次の文章になりました。それは現在まで変わっていません。

「わたくしたちの会は、子どもたちの切実な問題解決を核心とする学習指導によってこそ、新しい社会を創造する力をもつ人間が育つのだという確信から生まれました。したがって今日のようにこの確信、すなわち社会科の初志がしだいに薄れようとする段階においては、この会は教師がそのような世間の流れに抗してあくまで地道な研究と実践とを確保することができるように、たがいに結びあい励ましあう組織だということができます。

わたくしたちが注入を是とする立場を排し、いわゆる系統主義の知識教育、徳目主義の道徳教育とあくまであいられないのは、それらが人間の正しく育っていく真実にそむき、教育をゆがんだものにすると考えからです。もちろんわたくしたちが現在おかれている立場は決して安らかなものではありません。しかし、どんな権威もおそれずなっとくのいかないものには断じて屈しない強い意志の結びつきは、かならず子どもの幸福を守ることができると思います。」

事態はさらに変わってきています。わたしたちは、今、非常に大きい変動の時代に立っています。終戦直後も大変動の時でしたが、今はさらに大きい変動が起ころうとしているようです。その変動をいかにとらえ、いかに対決していくかは、わたしたちの大問題です。

地球の異変、自然の破壊、国際情勢の激変、科学・技術の高度化、情報システムの進展、交通運輸のシステムの変化、食糧の生産需給の変化、医学医術の進歩、高齢者の増加、女性の進出、経済の優先、政治の動揺激変等々、挙げきれません。しかも、それらが互いに関連しつつ、思いもかけぬ事態を現出させています。また、わたしたちの生活、わたしたちの従事している教育のあり方を動かしています。二十世紀から二十一世紀に移るということも、これらの変動に対する人びとの対応に影響してきています。社会科の初志をつらぬこうとする、わたしたちはいかに行動すべきでしょうか。

まず第一に、前述のような変動の原因や事情や成行といったものは難しく、自分たちにはとても捉え切れないものであるから、それぞれの専門家の判断や解説に従おう、という、受け身の姿勢に陥らないようにすべきです。これはどこまでも自分で考え、自分で追

究していく、という初志をつらぬく第一歩だからです。微に入り細に入ってという点では及ばなくても、素人のわたしたちが、意外に事態の真相に迫るといったことがあります。

第二に、自分の立場に立って、追究してみたことから、事態の変動についての意見を出すということです。わたしたちは、教育ということに専心しています。その教育の中にあらわれてくる前述の諸変化を感得し、自分なりに検討をしているはずで、その上に立て、自分の意見というものは無視したり軽視したりすべきものではありません。もちろん絶対ではありませんが十分に尊重すべきです。

第三に、わたしたちの見解や意見をよりよいものにするために、わたしたちは、同志の間での協力を重ねていくべきです。この際の同志には二種があります。一種は、同じ教育の活動にたずさわっている人たちです。もう一種は、教育を受けている人たち、わたしたちとともに人間の生き方、現在の自分のあり方を求めている学習者たちです。教師たちは、世事にうといとか、ひとりよがりであるとかいわれます。しかし教育といういとなみはそんな安易なものではありません。教育環境、教育条件という面からいっても、社会の変動が強い影響を及ぼして、それとの対決が大きなきととなのです。この対決を避ける教師たちは、天下り教育に屈してしましますが、わたしたちの同志は、互いに検討しあって前途を切りひらいて行きます。

学習者たちは、教師に盲従するものではありません。また盲従すべきものでもありません。一人ひとりが、人間として生きていく生き方を探究しているのです。一人ひとりの教師にとっては、最も身近な同志です。一人ひとりが、自分につながっている世界を探究しています。そこにあらわれてきている時代の変動を問題とし、これと対決しようと努力するのです。もちろん、そういう動きを紛らし消えさせようという社会の動きもあります。それを乗り越えて、進む学習者たちは、人間としては教師と同格であり同志です。教育者たちは、この同志からも学び、この同志と協力して、新しい時代に生きる道を求めるべきです。

同志を求めよう、同志を見つけよう、同志と助けあって、社会科の初志をつらぬこう。今は、その時代ではないでしょうか。

**(手塚山授業研究所)**

**『考える子ども』1992年1月号より**

(社会科の初志をつらぬく会編『考える子ども』No.273, 2002年5月号, pp.118-121)